東京新聞 2016年（平成28年）5月26日

多摩区の「被爆２世」森川聖詩さん

オバマ氏 広島訪問で願い

多摩 父親が広島で被爆した後に生まれた「被爆二世」で、脱原発の活動に取り組む川崎市多摩区の森川聖詩さん（六三）。今回のオバマ米大統領の広島訪問を「被ばく者を生まない社会への転換点にしてほしい」と、特別の思いを抱きながら見つめている。（山本哲正）

聖詩さんの父、森川定實さんは広島中央放送局（現NHK）の職員だった。一九四五年八月六日は、爆心地から一・五キロ足らずの広島市上流川町（現・同市中区）にある放送局にいた。原爆投下の瞬間、体は吹き飛び、気を失い、建物の下敷きに。その後、火が燃え盛る中を逃げ、人助けはできなかったという。「父は罪悪感を引きずっているようでした」と聖詩さん。

定實さんは血圧が高く、消化器系が弱かった。聖詩さんは一人っ子だが、その理由を母から「（父が）いつまで生きられるか分からなかったから」と教えられた。定實さんは大病はせず、二〇一一年に九十五歳で亡くなった。

聖詩さんは幼少時から腸が弱く病気がち。けがをするとなかなか治らず、傷口が化膿した。大人になり改

族の被爆を問われ、採用されなかった。結婚をめぐっても差別はあったが、三十三歳で結婚した。「幸運にも良い伴侶に出会いました」

翌年、子宝にも恵まれたと思ったが、胎内で成長できず、涙をのんだ。国は「（現時点で）放射線の遺伝的影響は認められない」との姿勢。聖詩さんは「被爆二世の問題に関わって多くの二世に出会いました。健康な人もいる半面、私と同じく、いろいろな体の不調を訴える人もいました。わが子のことも自分が被爆

㊤被ばく者を生まない社会への転換点に、とオバマ米大統領の広島訪問に期待を寄せる森川聖詩さん
㊦傷口が化膿しやすく、画面中央の傷は10日たっても治らないという＝いずれも多摩区で

就職、結婚で差別経験

「すべての原発を廃

故後は、脱原発に向けて再生可能エネルギーを普及する川崎市内のNPO法人に参加。また、再生エネを自給する仕組みづくりを各地で目指す中小企業経営者らが設立した一般社団法人にも加わった。経営者でも専門家でもないが、事務局として会合準備などに走る。

原発事故後、福島県の母親たちの多くが子どもの健康や差別に不安を抱いていると報じられると、聖詩さんはひとごとと思えなかった。「政府はすべての原発を廃炉に。被爆者と被爆二世はもとより原発事故の被ばく者にも医療保障をはじめ十分な補償をし、社会的差別をなくすことに取り組んでほしい」

聖詩さんは、オバマ米大統領の広島訪問について、「謝罪にはこだわらない」とする一方、米国内に根強い「原爆投下が戦争の犠牲者を減らした」という見方が変わるよう願う。「原爆投下は核兵器開発の人体実験だったと思う。使ってはいけなかった」